
いつだってその背中ごしに

朧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつだってその背中ごしに

【Nコード】

N9196E

【作者名】

朧月

【あらすじ】

遠足途中、皆とはぐれて迷子になってしまった幼き日の蘭。ついに泣き出した彼女の前に、蛇が現れる。幼い日のそんな出来事を思いながら、蘭は今もずっと、彼の帰りを待ち続ける。（某所に載せたお話の再録です・・・多分知らない人が多いけど）

推理するその小さな背中、まだとても脆くて発達段階だと思うのに……何だか淒く頼もしくて、飛びついて、ぎゅって抱きしめたいくなるの。

どんな時でも、私の事を守ってくれるその背中が、いつも私の心を元氣付けてくれた。そこに居るだけで安心できる……そんな感じだったよ。

思えば、それが私のまだ自覚も無かった恋心なんだって。気づいて自覚するのは、まだまだずーっと後かも知れないけど。

新一の一言一言が、私には淒く嬉しかったり、逆に心を引き裂かれたり。昔からずつとずーっと大きくて重いものだったの。

「ふええ……んっ」

周りを覆う、生き生きと瑞々しい緑、緑、そしてまた緑。木漏れ日が所々から彼女を照らす、その自然溢れる空間で、ついに耐え切れなくなった少女は泣き出した。

辺りにはまさに自分の何倍あるんだろうかという位の木々が生い茂り、その中に居るのは彼女たった一人だ。

必死でぐるぐる歩いたけれど、結果はただ、疲れて泥だらけ傷だ

らけになっただけだった。

「……ぐすつ。しんいちいつ、どこーっ？」

しゃくりながら、必死で大声を上げる。

張り上げられるだけのボリュームで叫んでも、何処からも返事は聞こえない。まさに、隔離された世界に取り残されてしまった。

「どっち帰ったらいいの？　むかえにきてよぉ」

それでも、自分の声しか聞こえない世界に不安はただ募るばかりだ。ただでさえ、いつも頼りにしている彼が居ないその状況では。

ほんの一時間ほど前までは、楽しい遠足だった筈だ。もし、なんの間違いもなければ、彼女は今頃変わらずクラスの皆と和気藹々とした時間を過ごして居た事だろう。

全ての元凶は、彼女の天性の方向音痴が引き起こした。トイレに行くといったのはいいが、帰れなくなってしまったのだ。

折角、迷うかも知れないから一緒に言っただけで、ついつい意地を張ってはねのけたのが一番痛かった。

「怖いよ、しんいちい」

こういう自然の中というのは、普段の生活からかけ離れているため、テレビで見た情報などが主に頭にインプットされている。

こんな草がぼうぼうに生い茂った所で遭遇しそうなものと言えば。蛇、クマ、巨大なバッファロー、ライオン、狼、エトセトラ。まだ幼い彼女には、そんな沢山の危険な生き物達が頭に浮かんだ。

「やだーっ。わたし、たべられちゃうの？」

想像すると、ぞっとした。考えれば考えるほど、体が震えて動けなくなっていく。

クラスの間は全く聞こえない。という事は、随分と離れてしまっているという事だ。

その時、ガサツと音をたて、前方の草が揺れた。

「ひっ」

少女は硬直し、思い切り息を呑む。前から這うように出てきたのは……三メートル以上もありそんな大蛇だった。

「き、きやああああーっ！！」

悲鳴を上げると同時に、蛇は勢いよく蘭の元へと這った。

自分が殺された説に一票。彼女は心の中で票を投じた。

蛇というと、まだ幼い彼女が想像するのは全て毒蛇。咬まれたらジ・エンドの即効性だ。しかし、死んだと思った後も、ずっと恐怖も自分の足が地に着いている感覚も消えなかった。

恐る恐る、目をあける。その視線の先に、自分の死体があったらどうしようなんて考えも、彼女の頭には浮かんでいた。

開けた目は、そこに映った景色にそのまま大きく見開けた。ずつと溜まっていた涙が、緊張感をなくして片目から一粒だけ零れ落ちる。

視界にあったのは、自分に噛み付いている蛇じゃない。まして、自分の死体なんかでもなかった。

「……ばーろっ。だから一緒にいつてやるっつただろ？」

開けた視界には、とても頼もしい背中があった。飛びついた蛇は彼が掲げる棒を咥えてぶら下がっている。

彼が思い切り枝をふると、蛇はテレビの某悪者役のように吹っ飛んで退散した。

「しんいちっ。しんいちいーっ!!」

後ろから、どんと飛びついて抱き着いて。確かにそこにある温もりに心底安堵しながら、少女は何度も彼の名を呼んだ。

彼は照れくさそうに、赤くなった頬を人差し指で二度三度かいた。

「ホラ、帰るぞらん。先生も心配してたんだからなー？ 今度からは、へんな意地はつてんじゃねーよ」
「うんっ」

頬を染めながら差し出された手を、ぎゅっと握り締めた。

頼もしい彼の背中と、手から伝わる温もりは、何よりも大きな支え。不安で仕方が無かった心が、いつの間にか柔らかく暖かくなつてゆく。

彼のもつ大きな光にあてられている、こんな優しい時間が、彼女

にはとてつもなく大切なものだった。

「懐かしいなあ、あの時の事」

新一に手を引かれて歩いたあの道は、疲れた子供の足には少しハードだったけど……前にある背中から沢山のパワーが伝わってくるの。

だから私、頑張れたの。いつも、辛い時も乗り越えてこれたんだよね。

『あんだよ、突然黙り込んだと思ったらしみじみしやがって』

「なんでもないわよ！ 新一が蛇の話なんてするから、変な事思いつ出しちゃったじゃない」

受話器越しに伝わるその声は、少し呆れたような、いつも通りの乱暴な言葉遣い。でも、元気そうな声に安心する。

だから私も声のトーンを一つあげて、強がって見せるの。もう私も子供じゃないんだから。新一の頼もしい背中が無くて、元気でやってるんだからね！ って。

『よくわかんねーけど、別に変わった事は何もねーんだな？』

「うん、だからあんたも早く帰ってきなさいよ？ ずっと、待ってあげるから」

『ああ、じゃあな！ また電話する！』

「最近寒くなってきたみたいだし、体、気をつけてね！」

切れた電話は少しでも名残惜しくて、胸がきゅっと締め付けられる。

次に声聞けるの、何日後かなあ？

でも、元気であればそれでいいもの。危険な思いしても、絶対ちやんと帰って来てくれるように祈ってるから。

待ってるからね。

あの幸せだった日々が、もう一度訪れるって、信じてる。
今度は私が、あなたにとってもよく似た、あの少し小生意気でもってても可愛い男の子に、頼りになる背中を見せていくから。

「ただいま、蘭姉ちゃん」

「あ、お帰りなさい。コナン君」

今はただ、この小さな男の子に、目一杯の笑顔を送る。そうすれば、コナン君もまた凄く幸せそうな笑顔を返してくれるから。

（後書き）

どうもですー

最近いろんな場所から引つ張り出す事が多くなりました、朧月です
こんばんはー（笑）

これもまた、某所で飾ったまんま出しました。比較的最近だしね
直しいれる必要もないかななんて。

ちび新蘭、前回Cloverで出したとき意外に人気でしたので、
ちよっぴり幸せに思いながら出す決心したのかなv

というわけで、（電話で）新蘭、（思い出で）ちび新蘭、（現在）
コ蘭を一話に詰め込んでみたお話でしたが、お気に召していただけ
ましたでしょうか？（^^）

もし楽しくお読みいただけたなら幸せですv

好評だと、また持ってきたくなるかも 色んな場所の限定公開もの
があつたりする私ですから（*^-^*）

それでは、突発と言う事でつたない短編を、お読みいただきまして
ありがとうございましたーv次作でも是非よろしくお願い致します
ね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9196e/>

いつだってその背中ごしに

2010年10月8日22時42分発行